

小堀先生のプロフィール

阪 口 豊 (地理)

ゲラシモフとマルコフの共著で1939年にモスクワから出版された「第四紀地質学」については、日本ではほとんど知られていないが、本書こそ第四紀学における最初の教科書であった。この本を私が手に入れるきっかけを作ったのは小堀先生であった。私が大学院に入って間もなくの頃だったと思う。ある日先生にさそわれて代々木あたりの飲み屋で、先生と親しい古書店の主人に紹介され、その時の話しのいきさつで後日、大陸の見知らぬ人々の手を経てすっかり黄ばんでしまった本書を手に入れることができた。その時先生の関心とつき合いの広さに感心したものである。

1956年、私はなくなられた多田文男先生と小堀先生の推挙で、江上波夫先生を団長とする東京大学イラクイラン遺跡調査団の一員に加えて頂いた。小堀先生とは分担した仕事のちがいで行を共にしたのはイランの数日間だけであったが、日本での準備段階から一年近い期間、先生からさまざまな形で探検学の何たるかを教えて頂いた。

先生は砂漠につかれた男である。先生はまだ学部の学生だった1944年、かつての満洲に出張、ホロンバイルの草原を調査し、その時のフィールドノートの一部は後に「満洲族薩満の祭祀を見て」などの最初の学術論文となった。この時、先生の畢生の仕事となった乾燥地域の研究の第一歩が踏み出されたのである。しかし、中国の東北地区にあるのは半乾燥地域であって本当の乾燥地域ではない。1949年東洋文化研究所助手、1954年地理学教室講師になられ、間もなく行われたイランイラク遺跡調査は先生にとって初めての本当の砂漠を見るチャンスであった。以後1958年故泉靖一東文研教授を団長とするアンデス学術調査、1961、1964、1967/68、1970年の人類学教室の鈴木尚名

誉教授を団長とする西アジア洪積世人類遺跡調査、そして自ら団長となって行った1977、1978、1980年の旧大陸フォッガラオアシス比較調査などほとんど毎年海外調査を重ねられ、その足跡は中国、ソ連中央アジア、西アジア、アフリカ、南北アメリカ大陸に及んでいる。先生の中心課題は砂漠の生活の基礎となる水の問題、とくにフォッガラ（カナート）という地下水道による乾燥地域に発達した灌漑組織の比較研究である。先生の豊富な経験と地理学者としての総合的な見方が評価され、各国から呼ばれ技術援助のあり方を献策されることも多い。

先生はすぐれた外交手腕の持ち主である。人をして“彼は道を誤った。外交官になるべきだった”といわせるほどの交渉のうまさは、緊迫した国際関係にある調査地域での海外調査を成功させる大きな原動力になった。私は先生と行を共にした調査団員から、先生の適切な判断によって危機を避けることができたという話をいくつも聞かされている。

先生は外国の研究者との交際も広く、外国の研究者・大学・研究機関についての驚くほど豊富な情報をもっておられ、先生の御努力で多くの著名な地理学者が地理学教室を訪問され、私たちに良い刺激を与えてくれた。1975年以来日仏地理学会の会長としてフランスとの学術交流を深められ、その功績に対し1977年フランス政府よりレジオン・ドヌール・シュヴァリエ勲章を授与された。

先生はまた本の虫でもある。冒頭の話もまたその現われであるが、先生に西アジアと北アフリカの地下水灌漑組織の比較研究を決意させたのは、1957年、イラクイラン調査の帰途カイロの書店で見た一冊のフランス語の地理書カポー・レイの

「仏領サハラ」に記述されているサハラのフォッ
ガラの説明であったという。旅行先で書店をたず
ね、書物を集めることを無二の楽しみにしておら
れる先生のおかげで地理学教室のアフリカ・西ア
ジア関係の図書は他の分野にくらべ格段に充実し
たものになっている。

先生のお人柄を気楽な気持で書くつもりがいさ

さか堅くなり、プロフィールならぬ正面像になっ
てしまった。先生は新年度から三重大学に移られ、
その新設学科の育成・充実に御多忙な毎日を通
されることになろうと思われるが、これまで集め
られたぼう大な研究データを一日も早くまとめら
れ、御研究の真価を世に問うて頂きたいと心から
願っている。